

審査の結果の要旨

氏名 佐藤英二

本研究は、近代日本の中等教育における数学教育の導入、定着、改造の過程をその主たる担い手の系譜に即して叙述し、数学教育の多様な思想と教授原理の特質を歴史的に考察している。

第一部「啓蒙としての数学教育の導入」においては、「算数学」と「算術」の訳語問題をとおして数学の「学」と「術」の性格が問われた経緯が記され（第1章）、和算の伝統をひく「三千題流」とフランスの数学を背景とする「理論流儀算術」との相克が導き出される。そして菊池大麓のイギリスを背景とする数学教育の導入に、アカデミズムの正統（東京帝大の数学教室）によるリベラルアーツとしての数学教育成立の功績を見ている（第2章）。

第2部「数学教育の制度化」においては、国民教育制度の確立と併行して進行した藤沢利喜太郎のドイツを背景とする数学教育の導入過程が分析され、藤沢の「算術」と「代数」の接続の論理と数学と社会の接続の論理に「普通教育」としての数学教育の探索の軌跡を読み解いている（第3章）。そして「普通教育」としての数学教育が未完に終わる中で、東京物理学校の「理論流儀算術」の系譜が教師の中に改造運動を準備し（第4章）、高等女学校では数学の性別の差異化が進行するなど（第5章）、数学教育の階層的な分化の過程が分析されている。

第3部「数学教育改造運動の諸系譜」においては、数学教育の正統的な系譜を形成した東京高等師範学校を中心勢力とする中等教師の研究活動（第6章）と「理論流儀算術」の系譜をひく小倉金之助による数学教育改造運動（第7章）が比較され、数学教育改造運動が実践的に影響を及ぼした実業学校を分析し、工業学校における微積分や問題解決的学習の導入が、産業主義の要請を基盤として展開した点を指摘している（第8章）。さらに、広島高等師範学校など、数学研究と教育の周辺の系譜においては、数学の教育内容と社会事象や産業技術との連関が促進されるが（第9章）、それらの改造運動が人的資源論と社会学の理論に依拠して総力戦体制に親和性を強めた過程が叙述されている（第10章）。

以上のように、本研究は、1880年代から1940年代にいたる中等学校における数学教育の展開を綿密な資料収集と精緻な分析によって歴史的に叙述して、1900年前後に「普通教育」としての数学教育が頓挫して以降、数学文化がどのような分化と統合を学校種別に推進したのかを構造的に開示している。本研究は、菊池、藤沢の再評価を迫るなど、各章の各トピックの研究において著者の独創的な視点と解釈を提示して先行研究の水準を凌駕している。さらに、これまで数学教育改造運動を基軸として叙述されてきた数学教育史に反省を迫り、明治以来の教育理念における「普通教育」と「国民教育」の葛藤、および、数学文化における学問と教育の葛藤を描き出した点で優れた論文として評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと判断された。